

# 「花の都しづおか」に世界クラスが誕生。

花関連の資源に恵まれた静岡県

静岡県は全国屈指の花の都だ。多様で高品質な花を多数生産するとともに、花にまつわる名所や花に関わる人材にも恵まれている。また、魅力的な観光地を数多く抱えていることから、「もてなし」の心を表す花の文化も息づいている。そんな花関連の資源を豊富に持つ静岡県内に花にまつわる世界クラスが2つ誕生した。「第17回世界バラ会議」で「優秀庭園賞」を受賞した「アカオハーブ&ローズガーデン」と「花のまちづくり国際コンクール」の国際部門で最高評価の「5つ花」を獲得した「牧之原市花の会」だ。

これまでに例のない

独創的なバラ園

急峻な山並みが海岸線に迫る熱海市の曾我浦。温暖な気候でありながら、厳しい自然も垣間見えるその地に「アカオハーブ&ローズガーデン

植を多用する同園には年間を通じて、様々な花が咲き乱れている。

地域に根付いた花のある暮らし

ふと足を止めて沿道の花に微笑む親子。牧之原市ではそんな光景が一年中、いたるところで見られる。花を育てているのは「牧之原市花の会」。平成18年に設立された会員

数258人(平成27年7月現在)の市民グループだ。同会はかつてこの地にあった榛原町の老人会、相良町の婦人会などが集まってきた団体だが、それそれが昭和50年代から町内美化や地域貢献の一環で花を植えているため、実質的な活動は35年以上におよぶ。

同会が花を育てているのは市内全域に点在する花壇や沿道で、総面積は2307m<sup>2</sup>にもなる。大きな植え替えは年に2回だが、水やりや花殻つみなどの作業はほぼ毎日行われている。その甲斐あつて市内には年間を通じて花があふれ、道行く人の目を楽しませている。そんな活動が開花し、同会は2013年度の全国花のまちコンクールで国土交通大臣賞を受賞。2014年度には日本代表と



富士山が世界文化遺産に登録されて以降、静岡県では世界遺産姫山反射炉やユネスコエコパークへの加盟が期待される伊豆半島など、世界クラスの魅力が急増している。そして「花の都しづおか」から花にまつわる2つの世界クラスが誕生した。

～がある。約20万坪の丘陵地に約

600種類、4000株のバラが咲き誇る景観は、一般的なバラ園と異なる立体的で多彩な表情を見せる。

同園は昭和63年、熱海にある「ホテルニューアカオ」が自然との共生を満喫してもらうことを目的にオープンさせたのが始まり。その後、敷地内に「ハーブガーデン」を造成し、平成14年に「アカオハーブ&ローズガーデン」となった。これまでにない独創的なバラ園は「イングリッシュローズガーデン」「フランスの香りのバラの庭」など12のガーデンからなり、草花との混植による植栽デザインによって、それぞれに個性的な空間を描き出している。そんな創意工夫が認められ、同園は今

年6月、「世界バラ会連合」が主催する「第17回世界バラ会議」において「優秀庭園賞」を受賞した。民間運営の施設としては国内初の快挙だ。

一般的なバラの最盛期は例年5月から6月末まで。秋バラは10月から11月にかけて見頃を迎えるが、混じてカナダ・シャーロットタウンで開催された「花のまちづくり国際コンクール」に参加し、国際部門で最高評価の「5つ花」を獲得した。同会の現会長・飯田京子さんは「花は育てる人にも、見て楽しむ人にも元気を与えてくれます。ですから、まず自分たちが楽しむことです」と語る。

ふじのくに「花の都しづおか」構想

静岡県は花に関する豊富な資源を活用して、ふじのくに「花の都しづおか」構想を進めている。これは「花の文化の継承と創造」「花き生産の振興」「人材の育成と活動支援」

「情報の集積・発信」という4本の柱によつて、春夏秋冬、花と緑があふれる「ふじのくに」を目指している。今回「アカオハーブ&ローズガーデン」と「牧之原市花の会」が世界で認められたことは、静岡県が花の都であることを国内外に向けてアピールする好機となつただけでなく、あらゆる資源を「場の力」として活用しようとする静岡県の底力を証明する形となつた。